

ヨハネの福音書(51)

「大祭司の祈り(3) 将来の信者たちのための祈り」

ヨハ17:20~26

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
- (3) イエスの私的奉仕(13:1~17:26)
 - ①最後の晩餐(13:1~30)
 - ②階上の間の説教(13:31~16:33)
 - ③大祭司の祈り(17:1~26)

2. 注目すべき点

- (1) 弟子たちへの教えは、勝利のことばで終わった。
 - ①「わたしはすでに世に勝ちました」(ヨハ16:33)
 - ②十字架、復活、昇天が予見されている。
- (2) この段階で、イエスの働きは預言者から祭司に移行した。
- (3) ここでの祈りは、聖書の中の最高の祈りである。

3. アウトライン(大祭司の祈り)

- (1) イエス自身のための祈り(17:1~5)
- (2) 弟子たちのための祈り(17:6~19)
- (3) 将来の信者たちのための祈り(17:20~26)

今回は、(3)を取り上げる。

イエスは私たちクリスチャンのために祈られた。

その祈りを3区分して学ぶと、神の守りの確実性が見えてくる。

I. 将来信じる人々のための祈り(20節)

1. 20節

Joh 17:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。

- (1) イエスの祈りは、弟子たちから将来の信者たちのための祈りに移行する。
 - ①「彼らのことばによってわたしを信じる人々」とは、将来の信者たちである。
 - ②イエスは2000年前に、私たちのために祈って下さった。

- (2) イエスは、教会時代の到来を予見しておられる。
 - ①イエスは死んで葬られ、復活し、昇天する。
 - ②聖霊が下り、教会が誕生する。
 - ③聖霊に力によって、使徒たちはイエスの証人となる。
 - ④使徒たちの宣教は、エルサレム、ユダヤ、サマリア、地の果てにまで広がる。
 - ⑤教会時代の信者は、直接的・間接的に使徒たちの証しによって救いに導かれる。
 - ⑥使徒たちの直接の説教や、後に書かれる新約聖書の著作も含まれる。

(3) 旧約時代の祭司と新約時代の祭司の比較

①旧約時代の祭司(出28:9~12)

- * 12部族の名前をエポデの肩に付けた。
- * 幕屋(神殿)の至聖所に宿るシャカイナグローリーの前に出た。

②新約時代の祭司

- * 将来の信者たちの名前を天の父の臨在の前に運んでおられる。

(4) 教訓

①使徒的証言の重要性

- * 「彼らのことばによって」
- * 教会の基礎は、使徒と預言者である(エペ2:20)。

②信仰の方向性

- * 「わたしを信じる人々」
- * 信仰は漠然とした宗教心ではなく、「イエス」に向けられるべきもの。

II. 信者の一致を願う祈り(21~23節)

1. 21節

Joh 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。

(1) イエスが語る一致

①一致のモデルは、父と子の関係である。相互内在。

- * 愛において、目的において、本質において、父と子は一致している。

②信者の一致は、まず父と子との関係の中に入れられることによって成立する。

- * 単なる人間同士の調和ではなく、神との交わりに根ざした一致。
- * 愛において、みことばの理解において、神への献身においての一致。

③ここでの「一つ」は、異邦人信者とユダヤ人信者が「新しい人」として一体化

することを指す(エペ2:15)。

(2) 1コリ12:13

1Co 12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。

- ①すべての信者は、同じ御霊によってバプテスマを受けた。
- ②聖霊のバプテスマは、信者の霊的一致の前提である。

(3) 一致の目的

- ①信者の一致した姿(イエスの人格の現れ)は、伝道の力となる。
- ②世の人たちはイエスを信じ、父がイエスを遣わしたことを信じるようになる。

(4) 教訓

- ①エキュメニカル運動: 教派を超えた結束を目指す運動(教会一致促進運動)
*キリスト教を越えた諸宗教間の対話と協力を目指す運動を指す場合もある。
- ②ヨハ17:21は、エキュメニカル運動の支持者が好むものである。
- ③この節が求めるのは霊的・教理的に健全な一致であり、外面的合同ではない。

2. 22~23節

Joh 17:22 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。

Joh 17:23 わたしは彼らのうちにおいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。

(1) 「あなたが下さった栄光」

- ①十字架の栄光のことであろう(ヨハ17:1~5で触れた内容)。
*十字架に続く、復活、昇天も含む。
- ②イエスはすでにその栄光を信者に下さった(神の視点)。
- ③現実には、それを受けるのは将来のことである(人間の視点)。
*新しい契約の祝福。聖徒に与えられている霊的身分。

(2) 教会は、イエスの十字架による贖いを信じたとき、父の計画と一つになる。

- ①教会とイエスは一つになる。
- ②教会は父なる神とも一つになる。

(3) 信者の一致のゴール

- ①父なる神がイエスを派遣したことを、この世が信じるため。
- ②父なる神が、イエスを愛されたように教会をも愛しておられることを、この世が知るため。
 - *この愛は、深く、親密で、いつまでも続く愛である。
 - *ひとり子(ユニークな子)を愛する愛である。
 - *信者は、この驚くべき愛で愛されている。

III. 信者の栄化を願う祈り(24~26節)

1. 24節

Joh 17:24 父よ。わたしに下さったものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、彼らが見るためです。世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわたしに下さった栄光を。

(1) 信者が受ける祝福

- ①永遠にイエスとともに住まうこと
 - *携挙後の天における教会の姿
- ②イエスの栄光を見るようになること
 - *イエスは栄光を捨てたが、再び元の栄光を受けるようになる。
 - *イエスの栄光を見るとは、信者が栄化されたことを示している。

(2) 「父よ。お願いします」

- ①ギリシア語で「 $\theta \acute{\epsilon} \lambda \omega$ 」という動詞
- ②英語で「Father, I will that」(KJV)、「Father, I desire that」(ASV)。
- ③「父よ、望むらくは、」(文語訳)
- ④イエスの願いと父なる神の御心は、常に合致している。
- ⑤信徒の栄化は必ず成就する。

2. 25~26節

Joh 17:25 正しい父よ。この世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知っています。

Joh 17:26 わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。あなたがわたしを愛して下さった愛が彼らのうちにあり、わたしも彼らのうちにいるようにするためです。」

(1) 「信者のための祈り」の結びのことば

- ①「正しい父よ」という呼びかけ

- ②父をたたえることばが、この世(父を知らない)との対比で使用されている。
- (2) イエスは父を知っており、それをこの世に伝えた。
 - ①父がイエスを遣わしたことを知った人々が、信者である。
- (3) イエスは、父の御名(本質)を啓示した。
 - ①これからも知らせ続ける(聖霊を通して)。
- (4) 信者は父なる神の愛の対象である。
 - ①イエスが信者の中にいるので、父なる神は信者を愛される。
 - ②神は愛である。
 - ③1ヨハ4:16

1Jn 4:16 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。／神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。

結論：今日の信者への適用

1. 私たちは祈られている(20節)。
 - (1) イエスは十字架の直前に、私たち一人ひとりの信仰を視野に入れておられた。
 - (2) 「忘れられていない」という深い安心感は、信仰の土台となる。
2. 一致は福音宣教の戦略となる(21~23節)。
 - (1) 教会の一致は、単なる和合や仲良しの意味ではない。
 - (2) それは、真理と愛に基づく一致である。
 - (3) 教理的確信を共有し、愛と謙遜で関係を築く。
3. 天の希望を意識して生きる(24節)。
 - (1) イエスの最終的願いは、私たちが「主のいる所にもとにいる」こと。
 - (2) この希望は、患難・迫害・死を乗り越える力になる。
 - (3) 「私の永住地はキリストのもとにある」との認識は、価値観と優先順位を整える。

ヨハネの福音書(52)

「逮捕されるイエス」

ヨハ18:1~11

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
- (3) イエスの私的奉仕(13:1~17:26)
- (4) イエスの受難(18~20章)
 - ①イエスの逮捕(18:1~11)

2. 注目すべき点

- (1) イエスを逮捕しようとする者たちが、ゲツセマネの園にやって来た。
 - ①金曜日の真夜中過ぎで、夜明けまではまだ時間がある。
- (2) ここから、イエスの逮捕、裁判、十字架刑へと進んで行く。
- (3) ユダヤ的背景を考慮しないと、この進み方を理解することはできない。
 - ①イエスは、口伝律法を破ったという理由で有罪にされる。
 - ②しかし、ユダヤ人の指導者自身が口伝律法に違反する。

イエスはいかなるときにも主権者である。

イエスの3つの行為がそれを示している。

I. イエスは先手を取られる(1~6節)

1. 1節

Joh 18:1 これらのことを話してから、イエスは弟子たちとともに、キデロンの谷の向こうに出て行かれた。そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。

- (1) イエスは大祭司の祈りを終えた。
 - ①ここから受難物語が始まる。
 - ②受難は、イエスの主権的選びの結果起こることである。
- (2) 「出て行かれた」は、自発的に受難に向かう決意を示す。
 - ①キデロンの谷の向こうへ
 - *冬の雨が降ると流れる川
 - *偶像や死の汚れと結びつくケデロンの谷を越えた。2列23章。
 - *罪と死を担うお方の歩みである。
 - ②そこには園があった。

*ゲツセマネの園であるが、ヨハネは「園」とのみ記す。

*「園」で最初のアダムが墮落し、「園」で最後のアダムが従順を示す。

③イエスは弟子たちと中に入られた。

2. 2節

Joh 18:2 一方、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスが弟子たちと、たびたびそこに集まっておられたからである。

(1) イスカリオテのユダは、イエスを銀貨30枚で売り渡した。

①これは、1番目の律法違反である。

②賄賂がからんだ逮捕は、律法違反である(出23:8参照)。

(2) **ユダが必要とされた理由**

①**群衆の目に触れない所でイエスを逮捕する必要があった。**

*ユダは、イエスがそこに来ることを予測し、先導役を果たした。

*ユダの罪は重い。

*イエスは逃亡するのではなく、いつもの場所に来られた。

②**ユダヤ総督ポンテオ・ピラトの前で証言する証人が必要であった。**

*証人がいなければ、ローマ兵の派遣はない。

③**イエスを裁くローマ法廷において証人が必要であった。**

*その前に、ユダは自殺することになる。

3. 3節

Joh 18:3 それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たちを連れ、明かりとたいまつと武器を持って、そこにやって来た。

(1) 「一隊の兵士」

①ギリシア語で「スペイラ」、ローマ軍の「コホルト」である。

②通常は400~600人(正式には800人)から成る歩兵部隊。分遣隊か。

③これは、ユダがポンテオ・ピラトの前で証言したことを示している。

④ピラトは、祭りの期間はカイサリアからエルサレムに上って来ていた。

⑤戦闘を想定した重装備で押しかけた。

⑥異邦人は、初期の段階からイエスの受難に関与していた。

(2) 「祭司長たちやパリサイ人たちから送られた役人たち」

①ユダヤ人の下役たち

②いわば、神殿の治安を維持する警察官である(temple police)。

(3) ユダは手抜きなく行動した。

- ①満月であるが、「あかり」と「たいまつ」を用意した。
- ②これは、2番目の律法違反である。日没後に刑事事件を扱ってはならない。
- ③彼らは、世の光である方を、「あかり」と「たいまつ」を持って捜しに来た。

4. 4節

Joh 18:4 イエスはご自分に起ころうとしていることをすべて知っておられたので、進み出て、「だれを捜しているのか」と彼らに言われた。

- (1) イエスは、事態の進展を支配しておられた。
 - ①彼らに見つかる前に、自ら進んで姿を現された。
 - ②十字架の死は、自発的なものであることが分かる。
 - ③とはいえ、ユダやイエスを十字架につけた人たちに罪がないわけではない。
- (2) 「だれを捜しているのか」は、イエスが逮捕劇を主導していることを示す。
 - ①イエスの自発性の現れである。
 - ②弟子たちの保護のためである。
 - ③羊を守る良き羊飼いの姿

5. 5~6節

Joh 18:5 彼らは「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「わたしがそれだ」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒に立っていた。

Joh 18:6 イエスが彼らに「わたしがそれだ」と言われたとき、彼らは後ずさりし、地に倒れた。

- (1) 「ナザレ人イエスを」
 - ①軽蔑的響きを持った呼称
 - ②彼らは、この方が創造主であり、救い主であることを知らなかった。
- (2) 「それはわたしです」
 - ①これは、イエスの神性宣言である。
 - ②出3:14、ヨハ8:58
 - ③イエスと最も近かった者が、今や敵の列に立っている。
- (3) イエスの神性に触れた彼らは、後ずさりし、地に倒れた。
 - ①イエスはすべての状況を支配しておられた。

②イエスの了解がなければ、彼らはイエスを逮捕することができない。

II. イエスは弟子たちを守られる (7~9 節)

1. 7~8 節

Joh 18:7 イエスがもう一度、「だれを捜しているのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。

Joh 18:8 イエスは答えられた。「わたしがそれだ、と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。」

(1) 2度目のやり取りがあった。

- ①彼らは、「わたしである」というイエスの宣言の意味と力を理解しなかった。
- ②2度目の「わたしがそれだ」は、「わたしがナザレのイエスである」という意味。
- ③イエスは、弟子たちを去らせよと要求した。

(2) 受難物語の中に牧者イエスの姿が啓示されている。

- ①イエスの主権 (尋問する側から主導する側へ逆転)
- ②弟子を守る愛 (ご自分を差し出して守る良い羊飼いの)
- ③救済史的意図 (将来の使命のための弟子たちの保護)

2. 9 節

Joh 18:9 これは、「あなたが下さった者たちのうち、わたしは一人も失わなかった」と、イエスが言われたことばが成就するためであった。

(1) これは、ヨハネによる解説である。

①ヨハ 17 : 12

Joh 17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。

(2) これは、救いの確実性の保証である。

- ①迫害や患難の中でも、救いの完成は揺るがない。
- ②ヨハネ独自の神学的註解である。

III. イエスは御父の御心に従順である (10~11 節)

1. 10 節

Joh 18:10 シモン・ペテロは剣を持っていたので、それを抜いて、大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。

(1) ペテロの軽率な行動

- ①彼は、暴力を使用してイエスを救おうとした。
- ②彼は漁師であるが、兵士ではない。
- ③二振りの剣のうちの一つを使った(ルカ22:38)。

(2) 大祭司のしもべの右の耳を切り落とした。

- ①マルコスは、大祭司の代理である。
- ②大祭司は、過越の祭りの間、可能な限り汚れに触れることを避けていた。
- ③マルコスの右の耳が切り落された。
- ④理性的理解に基づかない宗教的熱心は、人を過ちに導く。

2. 11節

Joh 18:11 イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。」

(1) イエスの叱責

- ①イエスは、父から与えられた杯を飲もうとしている。
- ②それを剣で妨害することは許されない。
- ③これは、弟子たちへの預言的警告ともなっている。

(2) ルカ22:51

Luk 22:51 するとイエスは、「やめなさい。そこまでにしなさい」と言われた。そして、耳にさわって彼を癒やされた。

- ①敵に対するイエスの愛
- ②ペテロに対する守り

(3) 「杯」

- ①杯は「父の御怒りの裁き」である。
- ②イエスはその杯を飲むことで人類の罪を贖われた。
- ③ゲツセマネの祈り(マタ26:39)と連続して解釈される。
- ④十字架により、怒りが私たちから取り除かれた。

結論：今日の信者への適用

1. 主の主権を認める生き方

- (1) イエスは、逮捕の場面を完全に支配しておられた。
- (2) 私たちにとって、偶然はない。

(3) 偶然に見える苦しみの背後にも、神のご計画がある。

2. 良い羊飼いに守られる安心

(1) 「わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。」 (18:8)

(2) 17:12の祈りの成就、主にあって「一人も失われない」ことの保証。

(3) 私たちも、「主が守ってくださる」という確信を持ち続けることができる。

3. 杯を受け入れる従順

(1) イエスは、父が与えた杯を飲まれた。神の怒りの杯。

(2) 私たちも、神が与える「試練の杯」「使命の杯」を受け取ることが求められる。

(3) 御父のご計画を信じ、従順に従う歩みこそが祝福につながる。

ヨハネの福音書(53)

「イエスの宗教裁判」

ヨハ18:12~27

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
- (3) イエスの私的奉仕(13:1~17:26)
- (4) イエスの受難(18~20章)
 - ① イエスの逮捕(18:1~11)
 - ② イエスの宗教裁判(18:12~27)

2. 注目すべき点

- (1) イエスは抵抗せず、自ら進んで捕らえられた。
 - ① 主権者はイエスである。
- (2) イエスはアンナスのもとへ連行された。
 - ① 公的な大祭司はカヤパであった。
 - ② アンナスは「影の権力者」であった。
- (3) 光と闇の対比が描かれている。
 - ① イエスは真理を公然と語る「光の側」。
 - ② ペテロは火のそばで闇に取り込まれていく「弱さの側」。

イエスは主権者である。

このことは4つの段階を通して明らかになる。

I. アンナスのもとに連行されるイエス(12~14節)

1. 12~13節

Joh 18:12 一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、

Joh 18:13 まずアンナスのところに連れて行った。彼が、その年の大祭司であったカヤパのしゅうとだったからである。

- (1) イエスは抵抗しなかった(神の主権)。
 - ① ローマ権力とユダヤ宗教権威が結託した異常事態。
 - ② 無抵抗のイエスを不必要に縛ったのは、恐れと敵意の反映である。
- (2) 「まず」(プロウトン)は強調で、裁判の順序の異常さを示す。
 - ① 現職の大祭司カヤパのもとへ行くべきだが、アンナスに送られた。

- ②これは権力構造の実体を暴露している。
- ③アンナスはカヤパの義父であった。

(3) アンナスが築いた「祭司の王朝」

- ①アンナスは紀元6~15年にローマから任命された大祭司。
- ②その後、5人の息子と娘婿カヤパが大祭司職についた。
- ③事実上「祭司の王朝」を築き、宗教権力の背後に君臨。
- ④ユダヤ人の中では、実質的権威はアンナスにあると見られていた。

2. 14節

Joh 18:14 カヤパは、一人の人が民に代わって死ぬほうが得策である、とユダヤ人に助言した人である。

- (1) カヤパは紀元18-36年の大祭司。
 - ①ローマによって任命され、政治的にローマの意向に沿う立場にあった。
 - ②彼の発言を繰り返している(ヨハ11:50)。
 - ③「ローマの怒りを避けるためにイエスを犠牲にしよう」という政治的助言。
 - ④ヨハネは、それを「神の救済計画の預言」と読み直している。

II. イエスを拒むペテロ(15~18節)

1. 15~16節

Joh 18:15 シモン・ペテロともう一人の弟子はイエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の家の中庭に入ったが、

Joh 18:16 ペテロは外で門のところに立っていた。それで、大祭司の知り合いだったもう一人の弟子が出て来て、門番の女に話し、ペテロを中に入れた。

- (1) 従う者の違い
 - ①動揺するペテロ
 - ②静かな証人ヨハネ
- (2) 社会的立場の違いを用いる神
 - ①「もう一人の弟子」とはヨハネである。
 - ②彼は大祭司の知り合いであった。
 - ③彼の身分が用いられた結果、裁判記録が残されることになった。
- (3) 外に立つ危うさ
 - ①中途半端な立ち位置が否認を招く。

2. 17~18節

Joh 18:17 すると、門番をしていた召使いの女がペテロに、「あなたも、あの人の弟子ではないでしょうね」と言った。ペテロは「違う」と言った。

Joh 18:18 しもべたちや下役たちは、寒かったので炭火を起こし、立って暖まっていた。ペテロも彼らと一緒に立って暖まっていた。

(1) 「あなたも、あの人の弟子ではないでしょうね」

- ① μη + 疑問形 → 「否定を予想する質問」
- ② 「まさか、あんたもこの人の弟子じゃないよね？」
- ③ ペテロにとっては答えやすい状況（しかし信仰的には試練）。

(2) 「違う」

- ① 短い断言
- ② ペテロの明確な否認。ここで第1回目の否認が成立。
- ③ 「召使いの女」の前での否認は、人間の弱さを露わにしている。

(3) 「炭火」

- ① 春先、夜間は冷える。
- ② ペテロは敵の陣営の中に立っている。
- ③ ヨハネ 21:9（ペテロの回復の場面）でも再登場。
- ④ 意図的な対比：「否認の炭火」と「回復の炭火」。

III. イエスを尋問するアンナス（19~24節）

1. 19節

Joh 18:19 大祭司はイエスに、弟子たちのことや教えについて尋問した。

(1) アンナスは「大祭司」と呼ばれている。

- ① 実質的な権威を有していた。
- ② 大祭司は終身職なので、辞職後もそう呼ばれる資格があった。

(2) 尋問の内容

- ① 弟子たちのこと
 - * 仲間の規模や性質に関心を持っていた。
 - * 反乱分子がどうかを探る政治的意図を反映している。
- ② 教え
 - * イエスの教えが律法に違反していないかを追求する意図がある。

(3) アンナスによる「予備審問」は違法である。

①証人を呼ばず、イエス本人に直接尋問している。

2. 20~21節

Joh 18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に対して公然と話しました。いつでも、ユダヤ人がみな集まる会堂や宮で教えました。何も隠れて話してはいません。

Joh 18:21 なぜ、わたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、それを聞いた人たちに尋ねなさい。その人たちなら、わたしが話したことを知っています。」

(1) 「世に対して公然と話した」

①大胆に、率直に、公然と

②完了形(λελαληκα)で「今もその影響が残っている」ことを強調。

③イエスの宣教は秘密結社ではなく、誰でも聞くことができた。

(2) 「何も隠れて話してはいません」

①同じ事実を別の角度から述べている。

②宣教が公のものであることは、今も変わっていない。

(3) 「なぜ、わたしに尋ねるのか」

①反問形で、アンナスの取り調べが不当であることを指摘。

②ユダヤ法では、裁判は必ず証人によって立証されるべき。

(4) 「それを聞いた人たちに尋ねよ」

①完了形「ακηκοοτας」で、「聞いたことがあり、今も覚えている者たち」。

②つまり、証人を呼ばばすぐに確認できるという意味。

③裁判の不当性を指摘された。

3. 22~23節

Joh 18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた下役の一人が、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。

Joh 18:23 イエスは彼に答えられた。「わたしの言ったことが悪いのなら、悪いという証拠を示しなさい。正しいのなら、なぜ、わたしを打つのですか。」

(1) 「平手でイエスを打った」

①侮辱行為の意味が強い。

②公判中の被告を殴ることはユダヤ法でも違法。

(2) 下役の行為は、不正を覆い隠すための暴力である。

①十字架の道への第一歩

(3) イエスは、冷静に裁判の正当性を求めた。

①侮辱を受けつつも、依然として「裁く者」としての姿を示す。

4. 24節

Joh 18:24 アンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カヤパのところに送った。

(1) イエスは「縛られたまま送られた」

①アンナスが実質権力を握りながらも公式裁判権はなく、カヤパに移送された。

②不正な尋問と屈辱の継続

③それは、神の救済計画の一部であった。

IV. イエスを3度拒むペテロ(25~27節)

1. 25節

Joh 18:25 さて、シモン・ペテロは立ったまま暖まっていた。すると、人々は彼に「あなたもあの人の弟子ではないだろうね」と言った。ペテロは否定して、「弟子ではない」と言った。

(1) ペテロはすでに1度否認した後も、「敵陣」にとどまっていた。

①からだは温まったが、心は冷えていた。

(2) 今度は「人々」が質問した。圧力が増している。

①否定を予想する質問である。

②ペテロは、短く答えた。

2. 26~27節

Joh 18:26 大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた人の親類が言った。「あなたが園であの人と一緒にいるのを見たと思うが。」

Joh 18:27 ペテロは再び否定した。すると、すぐに鶏が鳴いた。

(1) 肯定的答えを期待する質問

①3度目で「完全な否認」に到達した。

②他の福音書によると、ペテロは「呪いをかけて誓って」否認した(マタ26:74)。

(2) 否認の進展

①1回目(17節): 召使いの女 → 軽い問いかけ。

②2 回目 (25 節) : 複数の人々 → 社会的圧力が増す。

③3 回目 (27 節) : 大祭司のしもべ → 証拠を伴う問いかけ。

(3) ヨハ 13 : 38 の成就

Joh 13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにいのちも捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

①ペテロの失敗は、神の計画の中で許容されていた。

②ペテロの回復が用意されていた (ヨハ 21 章)。

結論 : 今日の信者への適用

1. 人間の権威と神の主権

(1) イエスは下役に「縛られ」たが、実際にはご自身を進んで差し出しておられた。

(2) 環境や権力に支配されているように見えても、神の御手が私たちを支えている。

2. 外的安心と内的冷え込み

(1) ペテロは「炭火で暖まりながら」否認を重ねた。

(2) 快適さや安全を優先すると、信仰の証しを失う危険がある。

3. 失敗を通して働く神の恵み

(1) ペテロの三度の否認は、イエスの預言の成就であった。

(2) 失敗は恥で終わらず、悔い改めと回復へと導かれる。

ヨハネの福音書(54)

「イエスの政治裁判」

ヨハ18:28~40

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)

2. 注目すべき点

- (1) 前回は、イエスが主権者であることを学んだ。
- (2) 今回は、イエスが真理の王であることを学ぶ。
- (3) ユダヤ人とローマの権力構造について学ぶ。
- (4) イエスの王国の性質について学ぶ。

人間の悪意でさえも神の計画のために用いられる。

3組の人々の悪意を通して、神の計画が前進する。

I. 祭司長たちの偽善(28~32節)

1. 28節

Joh 18:28 さて、彼らはイエスをカヤパのもとから総督官邸に連れて行った。明け方のことであつた。彼らは、過越の食事が食べられるようにするため、汚れを避けようとして、官邸の中には入らなかった。

(1) 政治裁判が必要だった理由

- ① ユダヤ人が死刑を執行する権利は、数か月前に取り去られていた。
- ② ユダヤ人たちは、イエスに対して冒とく罪で死刑判決を下していた。
- ③ しかし、ローマの死刑判決がなければイエスを殺すことはできなかった。
- ④ そこで、訴因を冒とく罪から反逆罪に変更して、イエスをローマ法廷に訴えた。

(2) ポンテオ・ピラト

- ① ローマ市民(スペインかイタリア生まれ)
- ② 26~36年にユダヤ総督であつた(procurator:ローマ帝国の代官)。
- ③ この裁判は30年に行われた。総督としての経歴のちょうど中間時点。
- ④ 残忍な人物として知られていたが、ローマ法の忠実な執行者でもあつた。
- ⑤ 前夜、イエスを逮捕するために一隊の兵士(400~600人)を派遣していた。

⑥早朝(午前6時前)ではあるが、衣服を整え、裁判の準備をしていた。

*祭司たち(貴族階級)がローマのために実質的にユダヤを管理していた。

*ピラトは、彼らの要請を無視することができなかった。

(3) 総督官邸

①アントニア要塞の中にあった。

②ユダヤ総督は、通常カイサリアに駐在していた。

③祭りの期間はエルサレムに駐在し、治安維持に当たっていた。

④過越の祭りの期間、ユダヤ人たちは特に興奮状態に陥りやすかった。

*この祭りのテーマは、「解放」である。

(4) ピラトのもとに来たのは、祭司長たちが中心であった。

①過越の食事は、前夜に終わっていた。

②祭司長たちが食する過越の食事は、朝になってから用意される。

③午前9時に、過越の子羊がほふられた。

④祭司長たちは、裁判が終わってから過越の食事をしようとしていた。

⑤異邦人の家に入ることは、儀式的な汚れを受けることを意味した。

⑥祭司長たちの偽善

*イエスを殺すことは平気であった。

*儀式的な汚れに関しては、細心の注意を払っていた。

2. 29~30節

Joh 18:29 それで、ピラトは外に出て、彼らのところに来て言った。「この人に対して何を告発するのか。」

Joh 18:30 彼らは答えた。「この人が悪いことをしていなければ、あなたに引き渡したりはしません。」

(1) ピラトが彼らのところに出て来た。

①ユダヤ人の指導者たちは、建物の中(法廷)には入らなかった。

②ピラトは建物の外に出て来て、彼らと対面した。

③ピラトは、ユダヤ人たちの宗教感情に妥協した。

(2) ピラトの質問

①ピラトは、ローマ法に従って、先ず告発の理由を尋ねた。

②この段階で、ユダが前に出て証言する予定であったが、彼はすでに死んでいた。

(3) 祭司長たちの回答

①具体的な罪状を挙げるができなかった。

* 冒瀆罪では通用しない。

* 「悪人」というレッテル貼り

②強引な主張

* 自分たちの裁判は終わった。

* 後は、あなたがそれを承認してくればいいのだ、という態度。

③ユダヤ人たちは、残忍な性質を持ったピラトを憎んでいた。

(4) 理不尽な裁判だが、神の側からは救いの計画が成就するための必然である。

①「引き渡す」とは、御子が死に渡されることを意味する。

3. 31~32節

Joh 18:31 そこで、ピラトは言った。「おまえたちがこの人を引き取り、自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」

Joh 18:32 これは、イエスがどのような死に方をするかを示して言われたことばが、成就するためであった。

(1) ピラトの応答

①彼は、ユダヤ人たちが妬みのゆえにイエスを訴えていることを見抜いた。

②彼は、イエスの勝利の入城を知っていた(見ていた)はずである。

③ユダヤ人の宗教に関することは、ユダヤ人の法廷で裁くべきである。

* これがローマ帝国内で広く行われている習慣であった。

(2) ユダヤ人たちの反論

①「私たちにはだれも死刑にすることが許されてはいません。」

②ユダヤ人から死刑執行の権利が奪われていた。

③ユダヤ人たちは、イエスの死刑をピラトに要求している。

(3) 十字架刑は、イエスのことばの成就である。

①ユダヤ法に基づけば、冒とく罪に対する刑は「石打ち」である。

②ローマ法に基づく死刑は、「十字架刑」となる。

③「二重の責任」(ユダヤ人と異邦人の共謀)が、すべての人類の罪を象徴。

II. ピラトの優柔不断(33~38節)

1. 33~35節

Joh 18:33 そこで、ピラトは再び総督官邸に入り、イエスを呼んで言った。「あなたはユダヤ人の王なのか。」

Joh 18:34 イエスは答えられた。「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」

Joh 18:35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人なのか。あなたの同胞と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか。」

(1) ピラトは建物の中に入り、イエスを個人的に尋問した。

- ①「あなたは、ユダヤ人の王なのか。」
- ②これは「あなたはカエサルのライバルなのか」という問いかけである。

(2) イエスは、質問に対して質問で答える。

- ①「この質問は、自分で考えたものなのか。」
- ②「あるいは、ほかの人(ユダヤ人)から聞いたのか。」
- ③ピラトへの普遍的問いかけである。
- ④ピラトが問われているだけでなく、すべての人間が問われている。

(3) ピラトの答え:「私はユダヤ人なのか」

- ①皮肉と軽蔑を込めた応答である。
- ②自分はローマ人なので、誰がメシアかという話題には興味がない。
- ③もちろん、ユダヤ人から聞いたということ。
- ④イエスは、ご自分の民から見捨てられ、訴えられたのである。

2. 36~37節

Joh 18:36 イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」

Joh 18:37 そこで、ピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりです。わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

(1) イエスは、ローマは自分のことを恐れる必要はないと言われた。

- ①イエスの国は、この世のものではない。
- ②もしそうなら、弟子たちが自分をユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。

(2) ピラトは、「それでは、あなたは王なのか」と尋ねた。

①「わたしの国」ということばに触発された質問である。

(3) イエスは、自分が王であることを認めた。

①しかし、ローマ帝国のような国の王ではない。

②イエスは、真理の証しをするために人となられた。

*父なる神、子なる神、聖霊、人間、罪、救いなどに関する真理である。

③真理を愛する者はみな、イエスの声を聞き分ける。

(4) 無千年王国説

①「わたしの国はこの世のものではありません」を根拠に千年王国を否定する。

②「この世のもの」とは、「サタンの支配下にある国」のことである。

③地上での千年王国の成就を否定していることばではない。

④イエスのことばは、神の国の起源の違いを示したものである。

3. 38節

Joh 18:38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何なのか。」／こう言ってから、再びユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私はあの人に何の罪も認めない。」

(1) 「真理とは何なのか」

①さまざまな解釈が可能であるが、皮肉を込めた応答であることは否定できない。

②ローマの政治家ピラトにとっては現実的意味を持たなかった。

③異邦人の代表であるローマ総督もまた真理を退けた。

(2) ピラトはユダヤ人たちのところに出て行き、イエスには罪がないことを認めた。

①イエスは、過越の子羊として適格であることが、ローマによっても証明された。

III. 群衆の倒錯した選択 (39~40節)

1. 39節

Joh 18:39 過越の祭りでは、だれか一人をおまえたたちのために釈放する慣わしがある。おまえたたちは、ユダヤ人の王を釈放することを望むか。」

(1) ローマ当局は祭りの緊張を和らげるため、囚人を一人釈放する慣例を設けた。

①ピラトは、イエスを釈放する手段に出た。

2. 40節

Joh 18:40 すると、彼らは再び大声をあげて、「その人ではなく、バラバを」と言った。バラバ

は強盗であった。

(1) バラバの正体

- ①「暴動と殺人の罪で投獄されていた」(マコ15:7、ルカ23:19)。
- ②「解放者」として民衆に人気があった可能性が高い。
- ③「命を奪う者」が釈放され、「命を与える方」が十字架へ。
- ④人間の価値判断の倒錯が明らかになる。

(2) 贖罪の型

- ①無実のイエスが罪人の代わりに刑罰を受ける。
- ②ここに「罪人のために死ぬ子羊」という福音の核心がある。

(3) 群衆の責任と私たちの責任

- ①すべての人間は「イエスを退け、自分に都合のよいバラバを選ぶ」傾向を持つ。
- ②その中で神は、罪人の選択を用いて救いを実現された。
- ③これは終末時代に「偽キリストを受け入れ、真のキリストを拒む」イスラエルの予表でもある。

結論：今日の信者への適用

1. 外側の形式よりも心の清さを重んじること。

- (1) ユダヤ人指導者たちは、汚れないように官邸に入らなかった。
- (2) しかし、その心はすでに不正義に満ち、神の御子を殺そうとしていた。
- (3) 外面的な宗教行為を守っていても、心の中でイエスを退ける危険がある。

2. 神の国の民として生きること。

- (1) 私たちが目指しているのは、神の霊的支配に基づく国である。
- (2) 千年王国は必ず地上に成就する。
- (3) 地上の国でも神の国の民として、別の価値観と忠誠を持って歩むべきである。

3. 相対主義を退け、イエスを真理として受け入れること。

- (1) イエスは「真理について証しするために生まれた」と言われた。
- (2) ピラトは「真理とは何か」と虚無的に問いかけ、すぐに退けてしまった。
- (3) 現代も相対主義が支配している。
- (4) 私たちは「真理はイエスご自身にある」と確信し、その声に聞き従う必要がある。

ヨハネの福音書(55)

「有罪判決」

ヨハ19:1~16

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)

2. 注目すべき点

- (1) 皮肉的にイエスが「ユダヤ人の王」であることが描かれる。
- (2) ピラトの「見よ、この人だ」の意味に注目する。
- (3) ユダヤ人は訴因を宗教的なものに変更する。
- (4) ピラトの恐れの意味とその結果に注目する。

人の悪意の中で神の計画は進む。

3つの悪意を取り上げる。

I. 不正な裁きを行うピラト(1~6節)

1. 1~3節

Joh 19:1 それでピラトは、イエスを捕らえてむちで打った。

Joh 19:2 兵士たちは、茨で冠を編んでイエスの頭にかぶらせ、紫色の衣を着せた。

Joh 19:3 彼らはイエスに近寄り、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、顔を平手でたたいた。

- (1) 革ひもに金属や骨片を埋め込んだ鞭で打った。
 - ① 鞭打ちは、背中を裂き、時に内臓まで損傷させる残酷な刑罰。
 - ② 多くの者がこの鞭打ちで命を落とした。
- (2) ここでの鞭打ちは、イエスを釈放しようとするための策略である。
 - ① ピラトは、血を見れば群衆は満足するだろうと考えた。
 - ② 通常は、刑場に着いてから鞭打ちを行う。
 - ③ イエスは2度の鞭打ちを受けた。1度目の鞭打ちは軽めであった。
- (3) 兵士たちも、イエスを嘲った。
 - ① いばらの冠を頭にかぶらせた。

②紫色の衣を着せた。

* 紫はローマ世界で王や高官を象徴する色。

③顔を平手で打った。

* 「万歳(カイレ)」は皇帝に献げる敬礼のことば。

* 平手で打つのは、侮辱を与えるための行為。

* イザヤ書53章「彼は侮辱され、ののしられても口を開かなかった」

(4) ヨハネの神学

①人間の意図は、イエスに対する侮辱であった。

②しかし、イエスがユダヤ人の王であることが逆説的に浮かび上がる。

③アダムは楽園に茨による呪いをもたらした(創3:18)。

④最後のアダムは、茨を冠としてかぶることにより、人類の呪いを身に負った。

2. 4~5節

Joh 19:4 ピラトは、再び外に出て来て彼らに言った。「さあ、あの人をおまえたちのところに連れて来る。そうすれば、私にはあの人に何の罪も見出せないことが、おまえたちに分かるだろう。」

Joh 19:5 イエスは、茨の冠と紫色の衣を着けて、出て来られた。ピラトは彼らに言った。「見よ、この人だ。」

(1) ピラトは、再度イエスをユダヤ人たちの前に連れてきた。

①無罪宣言を行うためであった。

②無残な姿を見せ、「これで十分ではないか」と訴えようとした。

③「見よ、この人だ」

* 「Ἰδὲ ὁ ἄνθρωπος」、 「エッケ・ホモ」(ラテン語)

(2) ヨハネの神学

①イエスを最後のアダムとして提示している。

②イエスを人間の弱さと苦しみを担う「人類の代表」として提示している。

③イエスを見ることは、神の裁きを受ける自分の姿を見ることである。

④神の計画は着実に進められている。

3. 6節

Joh 19:6 祭司長たちと下役たちはイエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは彼らに言った。「おまえたちがこの人を引き取り、十字架につけよ。私にはこの人に罪を見出せない。」

- (1) 血に飢えたユダヤ人たちを静める方法はなかった。
 - ①彼らは、「十字架につけろ」と激しく叫んだ。
 - ②2度くり返されているのは、憎悪の激しさを示している。

- (2) ピラトは、投げやりな拒絶のことばをくり返した。
 - ①ピラトの「無罪宣言」は、これが3度目である(18:38、19:4、6)。
 - ②ローマ法的にはイエスは完全に無罪であることが強調されている。
 - ③「おまえたちが……十字架につけよ」は皮肉である。
 - ④ユダヤ人たちは十字架刑にこだわった。
 - ⑤詩22篇、ゼカ12:10によると、メシアは「刺し貫かれる」必要があった。

II. 神の子を拒否する宗教指導者(7~11節)

1. 7節

Joh 19:7 ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。その律法によれば、この人は死に当たります。自分を神の子としたのですから。」

- (1) ユダヤ人たちは、ローマ法で無罪でも、律法では死罪に値すると述べた。
 - ①「この人は自分を神の子とした」
 - *神と等しい者とした。冒とく罪(レビ24:16)に相当する。
 - ②ヨハネの福音書全体のクライマックスの提示である。

- (2) 神学的告発(冒涇)を政治的処刑(十字架)につなげるという不自然な構造。
 - ①不自然な構造を通して神の計画が前進する。

2. 8節

Joh 19:8 ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れを覚えた。

- (1) 「神の子」ということばが、ピラトに大きな衝撃を与えた。
 - ①ローマ人にとって「神の子」(divi filius)は耳慣れた表現だった。
 - ②皇帝崇拜において、皇帝は「神の子」と称される。
 - ③ギリシア・ローマ神話では、人間と神の間に生まれた英雄を「神の子」と呼ぶ。
 - ④ピラトは、宗教的論争ではなく、超自然的存在を侮辱している可能性に直面。
 - ⑤イエスが持っている静かな威厳が、ピラトに良心の呵責を与え始めた。

- (2) 恐れの一重性
 - ①政治的恐れ(暴動、カエサルへの報告)
 - ②宗教的恐れ

(3) ヨハネの神学における逆説

- ① イエスを拒絶する群衆と、イエスに畏怖を抱く異邦人総督
- ② イエスは、世界にとって畏怖すべき存在である。

(4) 新しい訴因が出て来たので、裁判のやり直しが始まる。

- ① ここで、ピラトは再度官邸に入る。

3. 9~11節

Joh 19:9 そして、再び総督官邸に入り、イエスに「あなたはどこから来たのか」と言った。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。

Joh 19:10 そこで、ピラトはイエスに言った。「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」

Joh 19:11 イエスは答えられた。「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」

(1) ピラトは、イエスの出身地を聞いた。

- ① 彼は、イエスがガリラヤ出身であることを知っていた。
- ② ピラトには、イエスに対する恐れが芽生えていた。

(2) イエスは沈黙された。

- ① イザ53:7の成就
 - * イエスは、神の計画に従っておられた。
- ② ピラトは、イエスが自分を弁護しないので不思議に思った。
- ③ ピラトは、自分にはイエスを救う力があると告げた。
 - * 状況をコントロールできていない苛立ちが見える。

(3) イエスは2つのことを告げた(自己弁護ではない)。

- ① ピラトの権威は、限定的に神から委託されたものである。
- ② ピラトよりも、イエスを十字架に付けるために渡した者たちの罪の方が重い。
 - * 大祭司カヤパの罪、ユダヤ人の指導者たちの罪
 - * ピラトにも罪はある。使3章のペテロのメッセージ。
 - * 使徒信条の中にピラトの名が出てくる。

III. 世の王を選ぶ人々(12~16節)

1. 12節

Joh 19:12 ピラトはイエスを釈放しようと努力したが、ユダヤ人たちは激しく叫んだ。「この人を釈放するのなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者はみな、カエサルに背いています。」

(1) ピラトはイエスを釈放しようと努力した。

①イエスの罪を見出すことができない。

(2) 宗教的告発(神の子)から、政治的告発(反カエサル罪)への転換が起こる。

①自分を王とする者はカエサルに背く者である。

②もしイエスを釈放するのなら、カエサルに背く行為に加担したことになる。

③そうなれば、あなたは「カエサルの友」ではなくなる。

*ローマ皇帝の忠実な支持者に与えられる公式称号

④当時の皇帝は、ティベリウスである。

*病気になっており、猜疑心が強く、残酷な状態にあった。

*ピラトは、ユダヤ人たちが皇帝に直訴するのを恐れた。

(3) **ヨハネの神学**

①群衆は「カエサルこそ王だ」と告白し、メシアを拒絶。

②「真の王イエス」が拒まれることで救いの道が開かれる逆説を強調。

2. 13~14節

Joh 19:13 ピラトは、これらのことばを聞いて、イエスを外に連れ出し、敷石、ヘブル語でガバタと呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。

Joh 19:14 その日は過越の備え日で、時はおよそ第六の時であった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「見よ、おまえたちの王だ。」

(1) 官邸の中庭の「敷石」と呼ばれる場所で判決が下される。

①この日は、7日間の種なしパンの祭りの備え日であった。

②第六の時とは、午前6時である。

③ヨハネは意図的に過越の羊とイエスを重ねて描いた。

(2) ピラトは、「見よ、おまえたちの王だ」と皮肉を言った。

①ヨハネの神学的視点からは、真理を告げる証言となっている。

②逆説的に、ローマ総督自身がイエスの王権を公に宣言することになった。

3. 15~16節

Joh 19:15 彼らは叫んだ。「除け、除け、十字架につけろ。」ピラトは言った。「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」

Joh 19:16 ピラトは、イエスを十字架につけるため彼らに引き渡した。／彼らはイエスを引き取った。

(1) ピラトと祭司長たちのやり取り

①「除け、除け、十字架につけろ。」

* 共同体から徹底的に排除せよという意味

②「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」

* 皮肉と苛立ちが混ざっている。

③「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」

* ユダヤ人の王(メシア)を拒否した。

* イスラエルの真の王は神ご自身(1サム12:12、詩5:2など)

* これがイスラエルの公式なメシア拒否の宣言となる。

(2)「ピラトは、イエスを十字架につけるために彼らに引き渡した。」

①背後では、神が「御子をお与えになった」(3:16)の成就として描かれる。

②人間の悪意による「引き渡し」が、神の愛の「お与え」へと転換している。

結論：今日の信者への適用

1. 理不尽な状況の中でも神のご計画を信じる。

(1) 人間の裁きはしばしば不正なものである。

(2) しかしその中で、神の救いの計画は進められていた。

(3) 私たちも不条理に直面するが、神の御手が働いていると信じることができる。

2. 嘲笑の中でこそ真理を証しする。

(1) 茨の冠も紫の衣も、兵士たちは侮辱のために用いた。

(2) 結果的には「イエスは王である」という真理を示すしるしとなった。

(3) 私たちが世から嘲られても、神はその辱めを用いてご栄光を表してくださる。

3. 誰を王とするのかを選び取る。

(1) 祭司長たちは「カエサルのほかに王はない」と宣言した。

(2) これはイスラエルの公式なメシア拒否であった。

(3) 私たちも「この世の権力か、イエスか」という選択を迫られる。

(4) 「イエスは王」という告白は、一度限りであると同時に継続すべきものである。

ヨハネの福音書(56)

「十字架刑」

ヨハ19:17~30

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)
- ⑤ 十字架刑(19:17~30)

2. 注目すべき点

- (1) 王としてのイエスの姿が描かれる。
- (2) 大祭司としてのイエスの姿が描かれる。
- (3) 贖い主としてのイエスの姿が描かれる。

イエスは3つの役割を果たされた。

イエスは王であり、大祭司であり、贖い主である。

I. 王としてのイエスの姿(17~22節)

1. 17節

Joh 19:17 イエスは自分で十字架を負って、「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行かれた。そこは、ヘブル語ではゴルゴタと呼ばれている。

- (1) イエスは自分で十字架を負った。
 - ① 共観福音書では、クレネ人シモンが途中から十字架を担がされた。
 - ② ヨハネの強調点は、イエスが主体的に贖いの道を歩まれたことにある。
 - ③ 十字架の死は、自ら進んで選ばれたものである。
- (2) 「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行った。
 - ① ヘブル語でゴルゴタ、ラテン語でカルバリ
 - ② ユダヤの伝承では、アダムの頭蓋骨が埋葬された場所だとされる。
 - ③ ゴルゴタでの死は、旧約のいけにえ制度の型の完成である。
 - ④ 「宿営の外で焼かれる」贖罪のいけにえ(レビ16:27)の成就。

2. 18節

Joh 19:18 彼らはその場所でイエスを十字架につけた。また、イエスを真ん中にして、こちら側とあちら側に、ほかの二人の者を一緒に十字架につけた。

- (1) イエスを真ん中にした。
 - ①「罪人とともに数えられた」(イザ53:2)
 - ②人類を二分する象徴
 - * イエスをどう受け入れるかが唯一の分岐点になる。
 - ③人間的には辱めの象徴、霊的には「王として中央に座する」姿。
 - * これはヨハネの神学(十字架=栄光の顕現)に即している。
 - ④ヨハネの福音書全体でイエスは「中心に立つお方」(7:37、8:2、20:19)。
 - ⑤イエスは贖いの歴史の中心に立ち、全人類の行く末を決定する中心人物。

3. 19~20節

Joh 19:19 ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書かれていた。

Joh 19:20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。

- (1) 罪状書き
 - ①罪状を記した札が犯人の首に掛けられた。
 - ②後に十字架の上に掲げられた。

- (2) 「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書かれていた。
 - ①「自称ユダヤ人の王ナザレのイエス」を皮肉に強調した表現
 - ②神の視点からは、これは真理の宣言である。
 - ③人間の意図を越えて、神の計画が成就している例である。

- (3) 3言語で書かれたことの意味
 - ①ヘブル語：ユダヤ人の宗教的言語。
 - ②ラテン語：ローマ帝国の公用語、政治と権力の象徴。
 - ③ギリシア語：国際共通語、文化と哲学の象徴。

- (4) イエスが全世界の王であることの象徴。
 - ①すべての民族・文化・言語に対する普遍的支配を示す(黙7:9)。
 - ②「多くのユダヤ人が読んだ」(20節)。群衆への公的証言。
 - ③十字架は敗北の場ではなく、真の王が即位する場である。
 - ④ヨハネ独特の「逆説的栄光の神学」。

4. 21~22節

Joh 19:21 そこで、ユダヤ人の祭司長たちはピラトに、「ユダヤ人の王と書かないで、この者はユダヤ人の王と自称したと書いてください」と言った。

Joh 19:22 ピラトは答えた。「私が書いたものは、書いたままにしておけ。」

(1) ユダヤ人の指導者たちの抗議

① 群衆に誤解を与えないために「自称した」と書くように求めた。

(2) ピラトの回答

① 「私が書いたものは、私が書いたのだ」

② 皮肉と反抗のことば。ユダヤ人に対する最後の抵抗。

③ 「イエスがユダヤ人の王である」ことを確定する宣言となった。

④ 黙19章では「王の王、主の主」として再臨される。先取りの宣言。

II. 大祭司としてのイエス(23~27節)

1. 23節

Joh 19:23 さて、兵士たちはイエスを十字架につけると、その衣を取って四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。また下着も取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目のないものであった。

(1) ローマ兵の行為

① 処刑にあたった兵士たちは、受刑者の衣服を分け合う慣習があった。

② イエスの衣服は5点あったと考えられる。

* 外套、ベルト、サンダル、ターバン(または頭巾)、下着

③ 兵士は4人(小隊の一班)。4点を分け、残る「下着」が問題となった。

(2) 縫い目のない下着

① ヨハネは特に「縫い目のない一枚織りの下着」であったことを強調する。

② 現代の下着(肌着)とは違い、長袖または半袖のワンピース型の衣服。

③ 材質は麻布や羊毛で、縫い目のない「無縫製のチュニック」も存在。

④ 出エジ28:31~32:大祭司の服は「一枚織り」で作られた。

⑤ イエスの衣服は「真の大祭司」としての象徴と解釈できる。

(3) 神学的意味

① 人間の目には「敗北した罪人」と映るが、その衣服は大祭司であることを示す。

② イエスは十字架上で「大祭司」としての働きを成就している。

③いけにえの動物ではなく、ご自身を献げている。

2. 24節

Joh 19:24 そのため、彼らは互いに言った。「これは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」これは、／「彼らは私の衣服を分け合い、／私の衣をくじ引きにします」／とある聖書が成就するためであった。それで、兵士たちはそのように行った。

(1) 兵士たちの行為

- ①下着(キトン)は裂くと価値が下がるため、くじを引いて所有者を決めた。
- ②人間的には単なる習慣・偶然の行為、神の視点では預言の成就。

(2) 詩22:18の成就

Psa 22:18 彼らは私の衣服を分け合い／私の衣をくじ引きにします。

- ①ダビデの詩の中に描かれた受難の姿が、逐語的に実現した。
- ②兵士の無意識の行為さえ、神の主権のもとで預言成就の一部となる。

(3) 大祭司としての完成(ヘブ4:16)

- ①衣を裂かれずに残したことは、大祭司の衣の完全性を保つ象徴でもある。
- ②大祭司は衣を裂いてはならない(レビ21:10)。

3. 25節

Joh 19:25 イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた。

(1) 女性の信仰の忠実さ

- ①他の弟子たちが逃げる中、女性たちは信仰と愛のゆえに最後まで残った。
- ②神は「弱いと思われる者」を用いて、最も重要な証人とされた。

(2) マリアの立場

- ①母マリアの苦しみは特別である。
- ②彼女は「救い主の母」であって「救い主」ではない。
- ③ヨハネは、マリアを「苦しむ一人の信仰者」として描いている。

(3) 十字架のそばにいる人々は、後に教会を形作る信仰共同体の雛形。

- ①ユダヤ人女性たちが中心にいる。教会がユダヤ的背景を持つことを示唆。

4. 26~27節

Joh 19:26 イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。

Joh 19:27 それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。

(1) 新しい共同体形成

- ①母を弟子ヨハネに託すことで、信仰による新しい家族共同体を指し示した。
- ②これは教会時代における「神の家族」の先取り。
- ③イエスとマリアの母子関係は断ち切れ、主従関係が始まった。

(2) マリアの位置づけ

- ①マリアは「救い主の母」ではあるが、救いにおいてはあくまで「一信仰者」。
- ②イエスが「女の方」と呼んだのは、マリア崇拜を否定する聖書的根拠である。

(3) なぜ弟子ヨハネに委ねられたのか。

- ①この時点でイエスの肉の兄弟たちは不信仰だった。
- ②ゆえに「信仰に基づく関係」が優先された。

III. 贖い主としてのイエス (28~30節)

1. 28~29節

Joh 19:28 それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渴く」と言われた。

Joh 19:29 酸いぶどう酒がいっぱい入った器がそこに置いてあったので、兵士たちは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソブの枝に付けて、イエスの口もとに差し出した。

(1) 「わたしは渴く」は詩篇 69:21 の直接的成就。

- ①イエスのことばは単なる苦痛の叫びではなく、預言成就の宣言。

(2) 肉体と霊の両面の渴き

- ①イエスは真の人間として肉体的渴きを経験された。
- ②同時に、神からの断絶の中で霊的な渴きを経験された。
- ③これによって、私たちが「永遠に渴かない」救いを得る(4章、7章)。

(3) 贖いの完成への布石

- ①このことばは「完了した」(19:30)の直前に置かれている。
- ②イエスは預言成就を最後まで意識し、計画的に贖いを完成させた。

2. 30節

Joh 19:30 イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

(1) 「テテレスタイ」の法的意味

- ① 「完全に支払い済み」という法的・商取引的用語。
- ② 人類の罪の借金が完全に支払われ、追加の償いは不要となった。

(2) 旧約制度の終結と完成

- ① 動物の犠牲・律法・祭司制度はすべてここで完成。
- ② イエスは「大祭司」として、ご自身を唯一無二のいけにえとして献げた。

(3) 主体的死

- ① 「霊を渡された」は、イエスが自発的に死を選び取られたことを示す。
- ② 十字架の死は強制ではなく、愛による自由意志のささげ物。

結論：今日の信者への適用

1. 十字架が人類を二分する事実を受け止める。

- (1) 十字架は今も、人を「信じる者」と「拒む者」に分けている。
- (2) この分岐点の現実を覚え、十字架を伝える使命を担う必要がある。

2. 王なるイエスを告白する。

- (1) 「ユダヤ人の王ナザレのイエス」との札は3言語で掲げられた。
- (2) ここには終末の出来事の実現がある。
- (3) イエスを王と告白するとは、日常生活のすべての領域に主権を認めること。

3. 教会は新しい家族であることを認識する。

- (1) イエスは母と愛する弟子を新しい家族として結びつけた。
- (2) 血縁よりも深い「霊的家族」として教会を理解すべきである。
- (3) 互いに重荷を担い合うべきである(ガラ6:2)。
- (4) かしらであるキリストに近づくほどに、霊的家族の実体が完成する。

4. 贖いの完成に立って生きる。

- (1) 「完了した」は罪の支払いが完全に終わったという宣言。
- (2) 救いの不確かさや「わざによる贖い」に縛られる必要がない。
- (3) 完成した救いに立ち、安心と確信の中で生きるべきである。

ヨハネの福音書(57)

「埋葬」

ヨハ19:31~42

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)
- ⑤ 十字架刑(19:17~30)
- ⑥ 埋葬(19:31~42)

2. 注目すべき点

(1) 「福音の三要素」は歴史的事実である(1コリ15:3~5)。

- ① キリストは、私たちの罪のために死なれた。
- ② また、葬られた。
- ③ また、3日目によみがえられた。

(2) 埋葬は、「メシアの辱め」の最後の段階である。

- ① イエスのわき腹が槍で刺された。
- ② イエスの遺体が墓に葬られた(復活を証明するための必須条件)。
- ③ 次に来るのが「メシアの高揚」である。

私たちの信仰は歴史的事実の上に立っている。

この箇所を3区分して読むと、そのことが分かる。

I. イエスの死の確証(31~34節)

1. 31節

Joh 19:31 その日は備え日であり、翌日の安息日は大いなる日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に死体が十字架の上に残らないようにするため、その脚を折って取り降ろしてほしいとピラトに願い出た。

(1) 「備え日」とは、安息日のために備えをする日=金曜日。

- ① ユダヤ教の祭りの中で最も重要なものは、安息日である。
- ② 安息日が祭りの期間と重なると「大いなる日」(大安息日)と呼ばれた。

(2) ユダヤ人たちはイエスの死体の取り降ろしを願った。

①ローマ人たちは、死体をそのまま放置し、野獣や鳥に食わせた。

*死体の埋葬をしないことは、十字架刑の一部であった。

②ユダヤ人たちは、十字架につけられた者の遺体は汚れていると考えた。

*そのまま放置すれば、町が汚れる。

*特に、安息日に町が汚れることは容認できない(申21:22~23)。

*しかも、この安息日は「大安息日」であった。

(3) ユダヤ人たちは、3人の罪人の足のすねを折ることを願った。

①すねを折るのは、死期を早めるためである。

②ショック死、出血死、窒息死などが死因となる。

③数か所の骨を折ったと思われる。

④もし、すねを折らなければ、数時間から数日間、生き延びた。

(4) ユダヤ人たちの偽善

①イエスを十字架につけるといふ罪を犯しながら、儀式的な汚れにこだわった。

2. 32~34節

Joh 19:32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた一人目の者と、もう一人の者の脚を折った。

Joh 19:33 イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかつた。

Joh 19:34 しかし兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た。

(1) 兵士たちは、イエス以外の2人の罪人のすねを折った。

①彼らは、十字架上で6時間以上も苦しんでいた。

(2) イエスはすでに死んでいた。

①もはや、すねを折る必要はない。

②イエスの死は、自発的な死であった。

(3) 確認のために、兵士の一人がイエスの脇腹を槍で突き刺した。

①血と水が出て来た。

②「イエスは本当には死ななかつた」と主張する異端を退ける意味がある。

③血と水の流出は、イエスが確実に人間として死なれたことを証明する証拠。

*心膜や胸膜に水がたまった状態を示唆している。

④二重の象徴(血と水)を読み取ることができる。

*血は贖い、罪の赦しを示し、水は清めと聖霊による新しいいのちを示す。

II. 聖書預言の成就(35~37節)

1. 35節

Joh 19:35 これを目撃した者が証している。それは、あなたがたも信じるようになるためである。その証しは真実であり、その人は自分が真実を話していることを知っている。

(1)「これを目撃した者」とはヨハネ自身のことである。

①彼は自分が書いている証言が事実に基づくものであると断言している。

②これは、後に出てくる異端的教えを退けるためのものである。

*イエスは本当に死んだのではない。

*イエスは肉体を持たなかった。

(2)「それは、あなたがたも信じるようになるためである」

①ヨハネは単なる歴史の記録者ではなく、信仰を呼び起こす福音記者である。

②この証言が書かれた目的は、読者が信じるようになるためである。

*イエスはまことに死なれた。

*その死は贖罪のためである。

③ヨハ 20:31

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

④ヨハ 19:35 は、十字架の死の場面で、同じ目的をくり返している。

2. 36~37節

Joh 19:36 これらのことが起こったのは、「彼の骨は、一つも折られることはない」とある聖書が成就するためであり、

Joh 19:37 また聖書の別のところで、「彼らは自分たちが突き刺した方を仰ぎ見る」と言われているからである。

(1) 十字架の出来事は偶然ではなく、神の計画と旧約の成就である。

①ヨハネは、2つの旧約聖書の預言を引用する。

(2) 骨が砕かれない。

①出 12:46

Exo 12:46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたは家の外にその肉の一切れで

も持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。

②民9:12

Num 9:12 そのうちの少しでも朝まで残してはならない。また、その骨は折ってはならない。すべて過越のいけにえの掟とおおり、それを献げなければならない。

③詩34:20

Psa 34:20 主は彼の骨をことごとく守り／その一つさえ 折られることはない。

④イエスは過越の子羊としての死を遂げた。

⑤慣例に反して足を折られなかったことは、偶然ではなく神の救済計画の成就。

(3) 刺し通された方を見る

①ゼカ12:10

Zec 12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

②ここでは預言の部分的成就が示されている。

③将来イスラエルが民族的に悔い改めるときに完全な成就が訪れる。

III. 大胆な弟子たちの出現(38~42節)

1. 38節

Joh 19:38 その後で、イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取り降ろすことをピラトに願い出た。ピラトは許可を与えた。そこで彼はやって来て、イエスのからだを取り降ろした。

(1) アリマタヤのヨセフ

①福音書すべてに登場(マタ27:57~60、マコ15:43~46、ルカ23:50~53)。

*アリマタヤは、エルサレムの北西約35キロにある町。

②「金持ちの人」「有力な議員」「善良で正しい人」

③彼は公に信仰を表明できなかった。

④しかし、イエスの死を目撃した後、勇気を出して行動した。

⑤十字架が彼の人生の転換点となった。

(2) 彼は、イエスのからだの取り降ろしをピラトに願い出た。

①これがなかったら、ユダヤ人がからだを取り降ろし、城壁の外に投げていた。

②アリマタヤのヨセフにとっては、自分になんの利益もない危険な行為である。

③ピラトは許可を与えた(恩赦)。彼なりのユダヤ人に対する抵抗である。

④埋葬は、時間がないので、大急ぎで行う必要があった。

(3) 預言の成就

①イザ53:9

Isa 53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、／富む者とともに、その死の時に設けられた。／彼は不法を働かず、／その口に欺きはなかったが。

- ②この預言が、金持ちであるヨセフによって成就した。
- ③ローマの処刑人は、墓地に投げ捨てられるか、共同墓地に葬られた。
- ④イエスは例外的に「金持ちの墓」に葬られた。

(4) 神の摂理

- ①人間的に見れば、弟子たちは失望し逃げ去ったのは悲劇であった。
- ②しかし神は、「隠れた弟子」を用いて、メシアの葬りを成就した。
- ③救いの計画は、隠れた場所にいた人々を通して進められる。

2. 39~40節

Joh 19:39 以前、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬と沈香を混ぜ合わせたものを、百リトラほど持ってやって来た。

Joh 19:40 彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料と一緒に亜麻布で巻いた。

(1) ニコデモの登場

- ①読者は、「以前、夜イエスのところに来た」人物を覚えている。
- ②没薬（防腐剤）と沈香（香りづけ）を混ぜ合わせたものを持って来た。
 - *100リトラ（約32kg）とは莫大な量である。
 - *王としての埋葬を示している。
- ③彼もまた隠れ信者であったが、自らの信仰を表明した。

(2) 通常のユダヤ式埋葬法は、からだを洗い、没薬を用いながら亜麻布で巻く。

- ①ここでは、没薬と沈香を混ぜたものを使用されている。
- ②亜麻布は複数形であるので、トリノの聖骸布は偽物である。

3. 41~42節

Joh 19:41 イエスが十字架につけられた場所には園があり、そこに、まだだれも葬られたことのない新しい墓があった。

Joh 19:42 その日はユダヤ人の備え日であり、その墓が近かったので、彼らはそこにイエスを納めた。

(1) イエスが埋葬された墓

- ①ゴルゴタに近い墓で、墓地ではなく、園にある墓である。
- ②誰も葬られたことのない新しい墓である。
- ③これはヨセフの墓、金持ちの墓である。
- ④それを見ていたのが、マグダラのマリアとほかのマリアである。

(2) 神の摂理

- ①人間的には「急いだ結果、近くの墓に葬られた」にすぎない。
- ②神の視点から見ると、摂理の御手が働いた。
 - * 預言の成就(イザ53:9)
 - * 復活を証明する条件(新しい墓・他の遺体との混同なし)
 - * 王のように尊厳ある葬り(裕福な者の墓)

今日の信者への適用

1. 歴史的事実立つ信仰

- (1) ヨハネは自らの証言を強調した。
- (2) 信仰は歴史的事実に基づいている。
- (3) 相対主義に対して、「信仰は事実に基づいている」と主張する必要がある。

2. キリストの死の主権性

- (1) 兵士がイエスの足を折らなかったのは、イエスがすでに死んでいたから。
- (2) イエスの死は、自発的な死であった。
- (3) 骨が砕かれなかったこと、脇腹が刺されたことは旧約の預言の成就であった。
- (4) 救いは、主が成し遂げられたことを受け入れることで得られる。

3. 血と水の証し

- (1) 血は贖い、水は清めや新しいいのちを象徴している。
- (2) イエスの死は、赦しと新生を同時に与えるものである。
- (3) 日々「血による赦し」と「水による清め」の両方に生きることが大切である。

4. 隠れた弟子たち

- (1) アリマタヤのヨセフとニコデモは、これまで隠れていた弟子であった。
- (2) イエスの十字架の死を機に公然と信仰を表明した。
- (3) 私たちの信仰にも転換期が訪れる。

ヨハネの福音書(58)

「復活」

ヨハ20:1~18

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)
- ⑤ 十字架刑(19:17~30)
- ⑥ 埋葬(19:31~42)
- ⑦ 復活(20:1~18)

2. 注目すべき点

(1) 「福音の三要素」は歴史的事実である(1コリ15:3~5)。

- ① キリストは、私たちの罪のために死なれた。
- ② また、葬られた。
- ③ また、3日目によみがえられた。

(2) この箇所は、イエスの復活をめぐる最初の目撃証言である。

- ① 空の墓は客観的証拠であり、主に出会うのは個人的経験である。

イエスの復活は歴史的事実である。

ペテロ、ヨハネ、マグダラのマリアの体験がそれを証明している。

I. ペテロとヨハネの経験(1~11節)

1. 1節

Joh 20:1 さて、週の初めの日、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓にやって来て、墓から石が取りのけられているのを見た。

(1) 「週の初めの日」は、イエスが復活した日、新しい創造の始まりの日である。

- ① マリアは早い時間に墓に行き、その後日の出とともに他の婦人たちと合流。

(2) 神は、証人としての信頼性に欠ける女性を最初の復活の証人を選ばれた。

- ① 復活の歴史的信頼性は、神の逆説的選びによって証明された。

(3)「墓から石が取りのけられていた」というのは、客観的事実である。

①このことは、単なる霊的体験や幻覚ではない。

2. 2~3節

Joh 20:2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛されたもう一人の弟子のところに行って、こう言った。「だれかが墓から主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私たちに分かりません。」

Joh 20:3 そこで、ペテロともう一人の弟子は外に出て、墓へ行った。

(1) マリアは、ペテロとヨハネに報告した。

①誰かが墓から死体を取って行った。

②「私たち」という複数形の主語を用いている。

*他の女たちは、自分たちが見聞きしたことを使徒たちに報告した。

③墓に走ったのは、マリアの話を聞いたペテロとヨハネだけだった。

*2人の証人の証言は信頼できる。

2. 4~5節

Joh 20:4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。

Joh 20:5 そして、身をかがめると、亜麻布が置いてあるのが見えたが、中に入らなかった。

(1) ヨハネの方が、足が速かった。

①年齢差か。伝承では、ヨハネが使徒たちの中で最も若かった。

(2) ヨハネは先に墓に着いたが、のぞき込んだだけで、中には入らなかった。

①亜麻布が置いてあるのを見た。

*この状況は、混乱ではなく、秩序を示唆している。

*「見た」けれど、まだ信仰には至っていない。

②中に入らなかったのは、儀式的汚れを恐れてのことであろう。

③あるいは、ペテロに先を譲ったか。

3. 6~8節

Joh 20:6 彼に続いてシモン・ペテロも来て、墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

Joh 20:7 イエスの頭を包んでいた布は亜麻布と一緒にではなく、離れたところに丸めてあった。

Joh 20:8 そのとき、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来た。そして見て、信じた。

(1) ペテロは到着すると、中に入って様子を確かめた。

①亜麻布は、イエスの死体をくるんだ状態のままで残されていた。

*頭に巻かれていた布切れは、離れた所に丸めてあった(たたんであった)。

- ②つまり、イエスのからだは亜麻布を通過してなくなっていた。
- ③これは、復活のからだは地上のからだとは異なることを示している。
- ④ラザロの場合は、亜麻布を解く必要があった。

(2) ヨハネはペテロに続いて墓に入った。

- ①ヨハネも同じものを見たが、その意味を理解した。
- ②彼は、イエスが復活したことを信じた(初歩的な信仰)。
- ③墓が開いたのは、弟子たちが中に入って確かめるためであった。

4. 9~10節

Joh 20:9 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかった。

Joh 20:10 それで、弟子たちは再び自分たちのところに帰って行った。

(1) これは、ヨハネの感想である。

- ①ペテロとヨハネは、「復活の預言」をまだ理解していなかった。

(2) 墓に居続ける必要はないと判断し、彼らは町のどこかに戻って行った。

- ①体験はみことばの理解によって信仰と結びつく。

II. マグダラのマリアの体験(11~18節)

1. 11~12節

Joh 20:11 一方、マリアは墓の外にたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかかめて墓の中をのぞき込んだ。

Joh 20:12 すると、白い衣を着た二人の御使いが、イエスのからだは置かれていた場所に、一人は頭のところに、一人は足のところに座っているのが見えた。

(1) ペテロとヨハネが去っても、マグダラのマリアは墓に残った。

- ①愛する人を失くした喪失感がある。
- ②彼女にとっては、これは「通夜」(寝ずの番)である。
- ③主を慕い求める者に、特別な啓示が与えられた。

(2) 彼女は、墓の中をのぞき込んだ。

- ①そこに二人の天使が、白い衣をまとって座っていた。

*二人の御使いの配置は、幕屋の贖いの座を意図的に想起させる。

- ②天使が現れる時は、通常、男性の姿を取る。

*例外的には、イザヤが見たセラフィムの幻がある(イザ6:1~13)。

- ③彼女には、超自然的なことが起こっているという認識がない。
- ④御使いの登場は、ユダヤ的背景では「神的承認のしるし」として理解される。

2. 13~14節

Joh 20:13 彼らはマリアに言った。「女の方、なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私には分かりません。」

Joh 20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。そして、イエスが立っておられるのを見たが、それがイエスであることが分からなかった。

(1) 天使と対話しながら、マリアはそれに気づいていない。

- ①「女の方、なぜ泣いているのですか」
- ②「だれかが私の主を取って行きました」
*主に対する彼女の愛が溢れている。
- ③「どこに主を置いたのか、私には分かりません」
*人間の限界と悲しみが示されている。

(2) 彼女はうしろを振り向いた。

- ①背後に人の気配を感じたのであろう。
- ②しかし、それがイエスであることが分からなかった。
- ③「認識できない状態」から「目が開かれる経験」への移行は典型的なパターン。

3. 15節

Joh 20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、彼が園の管理人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。」

(1) イエスの質問

- ①「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか」
- ②マリアを真理へと導く優しい招きである。

(2) マリアの回答

- ①彼女は、その人を園の管理人(園丁、庭師)だと勘違いした。
- ②「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります」
- ③なぜイエスだと認識できなかったのか。
*涙で目が曇っていた。

- * イエスの姿があまりにも変化していた。
- * 神が一時的に靈的盲目状態を作り出された。
- * 喪失感が深く、正常な判断ができなかった。

4. 16~17節

Joh 20:16 イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、ヘブル語で「ラボニ」、すなわち「先生」とイエスに言った。

Joh 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

(1) マリアにイエスであるとの認識が生まれた。

- ①旧約聖書で最大の「認識事件」は「私はヨセフです」である(創45:1~3)。
- ②歴史上最大の「認識事件」はイエスを園丁と思ったことである。
- ③イエスを認識するきっかけは、「マリア」という呼びかけである。
- ④善き羊飼いは羊の名を呼び、羊はそれについて行く(ヨハ10:3,4)。
- ⑤終末時代に、ユダヤ人はイエスがメシアであることを認識する(ゼカ12:10)。

(2) 彼女は振り向いた。

- ①ヘブル語で、「ラボニ」と言った。敬愛と親しみを込めた呼びかけ。
- ②「私の先生」というニュアンスが含まれている。

(3) イエスは、マリアがイエスに触れることを許さなかった。

- ①「わたしはまだ父のもとに上っていないのです」がその理由であった。
- ②贖罪の日の大祭司の奉仕に対応している。
- ③イエスはその後、ご自身の血を携えて天の至聖所に入り、幕屋を清められた。
- ④信者は今「大祭司キリスト」を通して御座に近づける(ヘブ4:14~16)。

(4) マリアへの命令

- ①「わたしの兄弟たちのところに行って」
 - * イエスを信じる者たちは、神を天の父とする家族である。
 - * ロマ8:29
- ②「わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る」
 - * イエスは神の家族の中の長子である。

- *しかし、イエスと神の関係は、私たちと神の関係とは違う。
- *イエスの場合は、「わたしの父」である。
- *私たちの場合は、「私たちの父」である。

(5) マリアには、新しい使命が与えられた。復活の証人としての使命である。

- ①天使たちを見た。
- ②復活のイエスを見た。
- ③最初の目撃者となった。
- ④よき知らせを伝える者となった。

5. 18節

Joh 20:18 マグダラのマリアは行って、弟子たちに「私は主を見ました」と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。

(1) マグダラのマリアは、弟子たちによき知らせを伝えた。

- ①彼女は「使徒たちへの使徒」となったのである。

*「私は主を見ました」は、理解をともなった確信的な目撃である。

- ②しかし弟子たちは、彼女の証言を信じなかった(他の女たちの証言も)。

今日の信者への適用

1. 復活は歴史的事実である。

- (1) 信仰は事実に基づく。
- (2) マリアが最初に見たのは「石が取りのけられた墓」だった。
- (3) ペテロとヨハネも布が整然と置かれているのを確認した。
- (4) 感情ではなく、十字架と復活という確かな出来事を信仰の土台とすべき。

2. 復活は悲しむ者への慰めである。

- (1) マリアは墓の前で泣き続けた。
- (2) しかし、主は彼女に優しく語りかけられた。
- (3) 涙のただ中に主は立っておられる。
- (4) 主は、個人的に呼ばれるお方である。

3. 復活は新しい関係と使命の始まりである。

- (1) マリアは、復活の証人として遣わされた。
- (2) 「わたしの父、あなたがたの父」
- (3) 復活は信者を神の家族に迎え入れる新しい関係を確立した。

ヨハネの福音書(59)

「12弟子への顕現」

ヨハ20:19~29

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)
- ⑤ 十字架刑(19:17~30)
- ⑥ 埋葬(19:31~42)
- ⑦ 復活(20:1~18)
- ⑧ 12弟子への顕現(20:19~29)

2. 注目すべき点

(1) 復活の主が与える3つのもの

- ① 平安
- ② 聖霊
- ③ 使命

(2) トマスの信仰育成から学ぶ教訓

- ① 主は疑う者を見捨てない。
- ② 見ないで信じる信仰が祝された。

復活の主は私たちの人生に必要なものを与えてくださる。

11人の体験とトマスの体験からそのことを学ぶ。

I. 11人の体験(19~23節)

1. 19~20節

Joh 20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

Joh 20:20 こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。

(1) 状況説明

- ① 日曜日の夕刻(あるいは夜)のことである。

- ②弟子たちは夕食のために集まっていた。恐らく過越の食事をした二階部屋。
- ③彼らは、クレオパともうひとりの弟子の証言を聞いたばかりである。
- ④彼らはエルサレムとどまっている。ガリラヤに行こうとしていない。
- ⑤ユダヤ人たちを恐れて、部屋に鍵をかけて閉じこもっている。
- ⑥7週間後のペンテコステの日の彼らの姿とは全く異なる。
 - * 彼らは、イエスとともに逮捕されそうになった。
 - * 彼らは、ユダヤ人の指導者たちを恐れている。
 - * 彼らは、死を恐れている。

(2) イエスは、恵みのゆえに彼らの前に現われる。

- ①締め切った部屋に入って来られた。
 - * 復活のからだは栄化されたからだである。
 - * しかし、十字架上で死ぬ前のからだとの継続性がある。
- ②彼らの中に立たれた。
 - * 復活の主の臨在は教会共同体の中心にある。
- ③「平安があなたがたにあるように」と言われた。
 - * 「シャローム・アレヘム」。ユダヤ人の通常のあいさつ。
- ④ここではより重い意味を持っている。
 - * 罪の赦しに基づく平和 (ロマ5:1)
 - * 十字架による神との和解に基づく平安
 - * 恐れに支配されていた弟子たちの回復宣言
- ⑤その手と脇腹を示された。
 - * 復活の証拠性と贖いの永遠性を示す。
 - * 贖いの傷は永遠に残る。
 - * 「ほふられた小羊」として天で永遠に記憶される (黙5:6)。
 - * 残された傷は弱さの象徴ではなく、救いの完成を示す栄光のしるしである。
- ⑤弟子たちは喜んだ。
 - * 恐れ→平安→喜び (ヨハ16:20~22の約束)

2. 21~23節

Joh 20:21 イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

Joh 20:22 こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

Joh 20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

- (1) イエスは弟子たちに御子の権威を授けた。
 - ① イエスは父の権威を受けて派遣された。
 - ② 弟子たちは、イエスの権威を受けて派遣される。
 - * 大宣教命令のヨハネ版である(マタ28:18~20)。
 - ③ 「父→子→教会」という神の救済計画の流れに基づく。

- (2) 「聖霊を受けなさい」
 - ① イエスは息を吹きかけた。使2章では、聖霊が風のように下った。
 - * 創2:7とのつながり
 - ② ここでの聖霊の付与は、使2章の「聖霊によるバプテスマ」とは異なる。
 - ③ これは、みことばを理解させる力の付与であろう。
 - ④ 新生と聖霊の内住が与えられたと考えることもできる。

- (3) かつてペテロに与えられた使徒的権威が、全員に与えられた。
 - ① 「罪を赦す、罪を残す」とは、救いに関することではない。
 - ② これは、新約時代の信者の行動規範に関することである。
 - ③ 神の判断を宣言する権威が与えられた。

- (4) 11人に平安、聖霊、使命が与えられた。

II. トマスの体験(24~29節)

1. 24~25節

Joh 20:24 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

Joh 20:25 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。

- (1) トマスはその場にいなかった。
 - ① 理由は分からない。傷ついた心の結果、「孤独」を選んだ可能性がある。
 - ② 不在が責められるのではなく、不信仰が責められるべきである。

- (2) 交わりから離れると、信仰が弱くなりやすい。
 - ① 彼は、ほかの弟子たちの証言を信じなかった。
 - ② 見て、触れなければ信じないというのは、単なる不信仰ではない。
 - ③ 絶望と傷ついた心から出てきた疑いであろう。

④主は疑う者を見捨てない。

(3) 弟子たちは、それ以降もガリラヤに向けて旅立たない。

①恐らく、トマスのゆえであろう。

2. 26~27節

Joh 20:26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がか
けられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」
と言われた。

Joh 20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。
手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

(1) 状況説明

①8日後の日曜日である。

②弟子たちはまだエルサレムにとどまっている。

③この日、トマスは交わりに戻っていた。信仰回復のきっかけ。

④イエスは再び、恵みのゆえに彼らに現れた。

⑤主は責める前に「シャローム」を宣言し、信仰回復の道を開かれた。

(2) トマスへのことば

①イエスはトマスのことばを聞いていた。

②トマスのことばを正確に引用した。

③そして、愛の溢れることばを語った。

(3) 「ユダヤ的証拠要求」に対する主の応答であり、復活の事実を示す証拠である。

①2人の証人による証言

2. 28~29節

Joh 20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」

Joh 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信
じる人たちは幸いです。」

(1) 「私の主、私の神よ。」

①ヨハネの福音書のサブテーマの一つが、信仰と不信仰の対比である。

②イエスの敵の不信仰は進展し、最後は十字架刑でクライマックスを迎える。

③弟子たちの信仰も進展し、最後はトマスの信仰告白でクライマックスを迎える。

*主(キュリオス) = 権威者

* 神(セオス) = 礼拝の対象

④ 重要なのは、イエスがトマスの礼拝を受け入れたことである。

* 「ことばは神であった」(ヨハ1:1) → 「私の神」

(2) イエスの有名なことば

「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

① これは叱責ではなく、祝福宣言である。

* 使徒的証人の信仰

* 後の信者の信仰

今日の信者への適用

1. 復活の主は「平安」を与えてくださる。

- (1) 恐れに閉ざされた者に主は現れてくださる。
- (2) 信仰が不安に揺れても、それは主から見捨てられた状態ではない。
- (3) 「平安があなたがたにあるように。」
- (4) これは、十字架によって成し遂げられた平和と赦しの宣言である。
- (5) 交わりから離れないことが大切である。

2. 復活の主は「使命」を与えてくださる。

- (1) 復活は終わりではなく宣教の始まりである。
- (2) 父→子→教会
- (3) 救いはゴールではなくスタートである。
- (4) 教会は「守りの共同体」ではなく、「遣わされる共同体」である。

3. 復活の主は使命を果たすために「聖霊」を与えてくださる。

- (1) 使命は自力では果たせない。力の源は聖霊にある。
- (2) クリスマスは「努力型信仰」ではなく、「聖霊依存型の信仰」へと導かれる。
- (3) ペンテコステの日に聖霊によるバプテスマが成就し、力が与えられた。

ヨハネの福音書(60)
「しるし・信仰・いのち」
ヨハ20:30~31

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難(18~20章)

- ① イエスの逮捕(18:1~11)
- ② イエスの宗教裁判(18:12~27)
- ③ イエスの政治裁判(18:28~40)
- ④ 有罪判決(19:1~16)
- ⑤ 十字架刑(19:17~30)
- ⑥ 埋葬(19:31~42)
- ⑦ 復活(20:1~18)
- ⑧ 12弟子への顕現(20:19~29)
- ⑨ 執筆目的(20:30~31)

2. 注目すべき点

- (1) なぜヨハネの福音書は書かれたのか。
- (2) 本書は唯一、はっきりと「執筆目的」を述べている書である。
- (3) 本書は、「歴史の書」、「証拠の書」、「救いの書」である。

ヨハネの福音書には執筆目的がある。

「しるし・信仰・いのち」という3つのキーワードがそれを明らかにしている。

I. しるし

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

1. ヨハネは「しるしのほんの一部」しか書かなかった。

(1) 「しるし(セーメイオン)」とは何か。

- ① ただの奇跡ではない → イエスの本質を示す証拠である。
- ② 7つの「IAM」と対応する神学的役割がある。

(2) ユダヤ人にとって「しるし」とは。

- ① 神が本当にその人物を遣わしたのかどうかを確認する「メシア認定の証拠」

- ②ただの超常現象ではない。
- ③人を驚かせるためのものではない。
- ④神からの認証 (divine authentication) である。

2. ヨハネが選んだ「7つのしるし」

(1) カナで水をぶどう酒に (2:1~11)

- ①最初のしるし
- ②キリストがもたらす救いの喜び

(2) 王室の役人の息子を癒す (4:46~54)

- ①第2のしるし
- ②権威による遠隔の癒し
- ③信仰の成長

(3) ベテスダ池で病人を癒す (5:1~9)

- ①文脈上のしるし
- ②イエスは安息日の主
- ③意欲を失った人に与えられる恵み

(4) 五千人の給食 (6:1~14)

- ①人々は「しるし」を見た。
- ②いのちのパンであるイエス

(5) 湖の上を歩く (6:16~21)

- ①文脈上のしるし
- ②自然界に対する主権

(6) 生まれつきの盲人の癒し (9:1~7)

- ①「どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」
- ②肉の目を開き、霊の目を開く。

(7) ラザロの復活 (11:1~44)

- ①「あの者が多くのしるしを行っているというのに」
- ②イエスは「いのち」を与える主

(8) イエスご自身の復活(20章)

- ①文脈上のしるし
- ②すべてのしるしの頂点
- ③8は始まりを示す数字である。

3. しるしと信仰の関係

(1) しるしは信仰へ導くが、しるしそのものが救うのではない。

- ①しるしを見ても信じない人
- ②しるしなしでも信じる人

II. 信仰

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

1. 「イエス」という名の意味

(1) ヘブル語でイエシュア=主は救う。

- ①イエスは救いの唯一の道(ヨハ14:6)

2. 「神の子」の意味

(1) 単なる称号ではなく、神と同等の本質を持つ方。

- ①「神の子」とは「神と等しい存在」との宣言
- ②ヨハ5:18

Joh 5:18 そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っていただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。

- ③ヨハ14:9

Joh 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」

3. 「キリスト(メシア)」という称号の意味

(1) メシア=油注がれた者

- ①王・祭司・預言者
- ②イザ61:1(ルカ4:18でイエス自身が引用)

Isa 61:1 【神】である主の霊がわたしの上にある。／貧しい人に良い知らせを伝えるため、／心の傷ついた者を癒やすため、／【主】はわたしに油を注ぎ、／わたしを遣わされた。／捕らわれ人には解放を、／囚人には釈放を告げ、

4. どれだけ信じているかではなく、誰を信じているか。

III. いのち(ゾーエー)

Joh 20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。

Joh 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

1. ただの生存(ビオス)ではない。

(1)「神との交わりにある永遠のいのち」

①ヨハ10:10

Joh 10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。

2. 「イエスの名によって」とは

(1) 名=権威・人格・救いの働き

①自力救済ではなく「キリスト依存の救い」

3. 信仰の目的は「知識」ではなく「いのち」である。

(1) 信仰は情報ではなく関係である。

①信じる=委ねる(ピステューオー)

今日の信者への適用

1. しるしの目的は信じるため

(1) しるしは、キリストへ導くために与えられた。

2. 信じる目的はいのちを得るため

(1) 「情報としての信仰」ではなく「人格的信頼としての信仰」

3. いのちを得る道はただ一つ:キリスト

(1) 他の宗教にも「真理の残渣」はある。

(2) 救いに至る啓示は、聖書だけに記されている。

ヨハネの福音書(61)
「ガリラヤ湖畔での顕現」
ヨハ21:1~14

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
- (3) イエスの私的奉仕(13:1~17:26)
- (4) イエスの受難(18~20章)
- (5) エピローグ(21章)
 - ①ガリラヤ湖畔での顕現(21:1~14)
 - ②イエスとペテロの対話(21:15~23)
 - ③後書き(21:24~25)

2. 注目すべき点

- (1) この出来事は、エルサレムでの2度の顕現(20章)に続く3度目の顕現。
- (2) 舞台はティベリアの湖(ガリラヤ湖)。弟子たちは故郷に戻って来た。
- (3) 弟子たちは依然として「何をすべきか」を見失っている。
- (4) この出来事は、弟子たちの再召命と再建の物語である。

主は赦しと再出発の場を整えられる。

主イエスが弟子たちを取り扱うステップを見る。

I. 弟子たちの状態(1~3節)

1. 1節

Joh 21:1 その後、イエスはティベリア湖畔で、再び弟子たちにご自分を現された。現された次第はこうであった。

- (1) ついに弟子たちは、ガリラヤに帰還した。
 - ①主の命令に従った(マタ28:10, 16)。
 - ②弟子たちは最初の召命の場に戻った。
 - ③そこでイエスは弟子たちの前に姿を現された。これで、3度目である。
 - ④これは神の計画を明らかにする「啓示的顕現」である。
- (2) この時の弟子たちの心境
 - ①エルサレムでは、驚くべき出来事を息つく間もなく体験した。
 - ②勝利の入城→王国への期待→ユダの裏切り→逮捕の危険→ペテロの3度の拒否

→イエスの死→復活→2度にわたるイエスの現れ

- ③故郷に戻った彼らは、間違いなく混乱し、将来に不安を覚えていた。
- ④しかし、弟子たちの召命はやり直しが可能である。

2. 2~3節

Joh 21:2 シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、そして、ほかに二人の弟子が同じところにいた。

Joh 21:3 シモン・ペテロが彼らに「私は漁に行く」と言った。すると、彼らは「私たちも一緒に行く」と言った。彼らは出て行って、小舟に乗り込んだが、その夜は何も捕れなかった。

(1) 7人の弟子たちがそこにいた。孤立していなかった。

- ①シモン・ペテロ
- ②デドモと呼ばれるトマス
- ③ガリラヤのカナ出身のナタナエル
- ④ゼベダイの子たち(ヤコブとヨハネ)
- ⑤ほかに2人(恐らくアンデレとピリポ)
- ⑥完全数。「弟子共同体」の象徴。

(2) ペテロがある提案をした。かなりの時間の経過を感じさせるものである。

- ①「私は漁に行く」=「私は漁師に戻る」
- ②自分は失敗者だという意識があったのであろう。
- ③家族を支えなければならない。食べる心配をしなければならない。
- ④ペテロのせっかちな性格が現れている(墓に最初に入ったのも彼であった)。
- ⑤他の6人の弟子たちもペテロに合流した。
- ⑥これは召命の放棄である。
- ⑦無批判にリーダーに従う危険性が見られる。

(3) その夜は何もとれなかった。

- ①神の摂理が働いていた。
- ②主の召命を受けた者が自分の働きに戻っても祝福はない。
- ③この一文が、この箇所的神学的中心である。
- ④無駄な一日が再召命の基盤となる。

II. 復活のイエスの顕現(4~8節)

1. 4~6節

Joh 21:4 夜が明け始めていたころ、イエスは岸辺に立たれた。けれども弟子たちには、イエス

であることが分からなかった。

Joh 21:5 イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ、食べる魚がありませんね。」彼らは答えた。「ありません。」

Joh 21:6 イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れます。」そこで、彼らは網を打った。すると、おびただしい数の魚のために、もはや彼らには網を引き上げることができなかった。

(1) イエスは岸辺に立たれたが、弟子たちはそれがイエスだと分からなかった。

- ①まだ夜が明けきっていなかったのか、あるいは、距離があったのか。
- ②「夜が明け始めていた」とは、新しい始まりを象徴している。
- ③霊的盲目から開眼への変化が起こる。

(2) イエスは「子どもたちよ」と呼びかけた。

- ①愛の呼びかけである。
- ②「食べる魚がありませんね」は、魚は獲れたかという問いかけである。
- ③自分の判断で動くことがいかに無意味であるかを自覚させる問いである。

(3) 舟の右側に網をおろすようにと助言した。

- ①主の命令による行動への呼びかけである。
- ②舟の右側に網をおろすのは、通常の方法ではない。
- ③その助言に従うと、おびただしい魚がとれた。
- ④網を引き上げることができないほどの大魚であった。
- ⑤最初に召命を受けた時のことを思い出させるものであった(ルカ5:1~11)。

2. 7~8節

Joh 21:7 それで、イエスが愛されたあの弟子が、ペテロに「主だ」と言った。シモン・ペテロは「主だ」と聞くと、裸に近かったので上着をまとい、湖に飛び込んだ。

Joh 21:8 一方、ほかの弟子たちは、魚の入った網を引いて小舟で戻って行った。陸地から遠くなく、二百ペキスほどの距離だったからである。

(1) 最初にそれがイエスだと気づいたのは、ヨハネである。

- ①イエスの復活を最初に信じたのもヨハネであった。
- ②信仰による識別の象徴である。

(2) ペテロは、上着をまとって湖に飛び込み、泳いで岸に向かった。

- ①衝動的に行動するペテロ
- ②ほかの弟子たちは、網を上げないで小舟で引いて岸にたどり着いた。

*岸までは百メートル足らずの距離であった。

III. 和解の食事(9~14節)

1. 9~11節

Joh 21:9 こうして彼らが陸地上ると、そこには炭火がおこされていて、その上には魚があり、またパンがあるのが見えた。

Joh 21:10 イエスは彼らに「今捕った魚を何匹か持って来なさい」と言われた。

Joh 21:11 シモン・ペテロは舟に乗って、網を陸地に引き上げた。網は百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったのに、網は破れていなかった。

(1) 岸には、朝食が用意されていた。

①炭火の上で魚が焼かれていた。パンもあった。

②炭火は2回のみ登場(18:18と21:9)。神学的意図がある。

(2) 弟子たちが捕った魚も炭火の上に載せられた。

①イエスは、弟子たちの働きを評価された。

②人間の奉仕と神の恵みの協働を示している。

(3) 舟に乗りこんで、網を陸地に引き上げたのはペテロであった。

①他の弟子たちにできなかったことを、ペテロがした。

②ペテロのリーダーシップが暗示されている。

(4) これは、小規模な奇跡である。

①153匹という数

*比喩的解釈ではなく、字義通りの解釈がよい。

*漁師仲間では、魚の数を数えて、均等に分配する習慣があった。

②網は破れなかった。

*イエスは、網が破れるようなことをお命じになることはない。

2. 12~14節

Joh 21:12 イエスは彼らに言われた。「さあ、朝の食事をしなさい。」弟子たちは、主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか」とあえて尋ねはしなかった。

Joh 21:13 イエスは来てパンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。

Joh 21:14 イエスが死人の中からよみがえって、弟子たちにご自分を現されたのは、これですでに三度目である。

(1) イエスは弟子たちを食事に招いた。

①弟子たちは、イエスだと分かったので「あなたほどなたですか」と尋ねなかった。

(2) イエスがパンと魚を彼らにお与えになった。

①これは、ユダヤ的には和解の食事であり、弟子たちに強い印象を残した。

②使10:39~41(コルネリオに対するペテロのメッセージ)

Act 10:39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムで行われた、すべてのことの証人です。人々はこのイエスを木にかけて殺しましたが、

Act 10:40 神はこの方を三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。

Act 10:41 民全体ではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちに現れたのです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられた後、一緒に食べたり飲んだりしました。

(3) 3度目は完全数

①使徒全体の使命を回復するためであった。

今日の信者への適用

1. 失敗の夜のあとに新しい朝が訪れる。

(1) 弟子たちは夜通し働いたが、「何も捕れなかった」(21:3)。

(2) 主は、私たちの力が尽きた瞬間に働かれる。

(3) 「無収穫の夜」は、再献身の土台である。

2. 従順は祝福の前提である。

(1) 「舟の右側に網を下ろしなさい」(21:6)

(2) 従ったとき、想像を超える大漁が起こった。

(3) 信仰生活の転機は、「一つの小さな従順」から始まる。

3. 恵みはすでに備えられている。

(1) 陸に上がると、すでに炭火と魚とパンがあった(21:9)。

(2) 主は彼らの努力の前に、すべてを用意しておられた。

(3) と同時に、彼らの努力も評価された。

4. 私たちも交わりの食卓に招かれている。

(1) 主は、罪と失敗を責めることなく、食卓で赦しを与える。

(2) 炭火の場面は、ペテロの再出発の場となった。

(3) 主は私たちを和解の食卓に招いておられる。

ヨハネの福音書(62)
「イエスとペテロの対話」
ヨハ21:15~25

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
- (3) イエスの私的奉仕(13:1~17:26)
- (4) イエスの受難(18~20章)
- (5) エピローグ(21章)
 - ①ガリラヤ湖畔での顕現(21:1~14)
 - ②イエスとペテロの対話(21:15~23)
 - ③後書き(21:24~25)

2. 注目すべき点

- (1) 3度の質問と3重の委託
- (2) ペテロの殉教の予告
- (3) 弟子道の原則

イエスはペテロの使徒職を回復された。

3つのステップを通してそれが行われた。

1. 3度の質問と3重の委託(15~17節)

1. 15節

Joh 21:15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」ペテロは答えた。「はい、主よ。私があなたを愛していることは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの子羊を飼いなさい。」

(1) 最初の質問

- ①「あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか」
- ②「私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」
- ③ペテロは、他者との比較をしなくなっている。

(2) 最初の委託

- ①「わたしの子羊を飼いなさい」と命じた。
- ②「子羊」とは、靈的に幼い信者のことである。

- ③ここでは、漁師のイメージから、羊飼いのイメージへの移行がある。
- ④伝道の強調から、牧会の強調への移行がある。
 - *教会の誕生が前提となっている。
 - *「飼う」は「ボスコウ」(食べさせる)である。
- ⑤ペテロは、ペテロの手紙第一を書いてこの命令を果たした。

2. 16節

Joh 21:16 イエスは再び彼に「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛していますか」と言われた。ペテロは答えた。「はい、主よ。私があるあなたを愛していることは、あなたがお存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」

(1) 第2の質問

- ①「あなたはわたしを愛していますか」
 - *イエスも、他者との比較をやめた。
- ②「私があるあなたを愛していることは、あなたがお存じです」
 - *ペテロの答えは、最初と同じであった。

(2) 2番目の委託

- ①「わたしの羊を牧しなさい」
 - *「わたしの羊」とは、信者一般である。
 - *「牧する」は「ポイマイノウ」(羊飼いの仕事をする)である。
- ②ペテロは使徒たちの中でリーダーとなり、初代教会で群れを監督した。

3. 17節

Joh 21:17 イエスは三度目もペテロに、「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛していますか」と言われた。ペテロは、イエスが三度目も「あなたはわたしを愛していますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ、あなたはすべてをお存じです。あなたは、私があるあなたを愛していることを知っておられます。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

(1) 第3の質問

- ①「あなたはわたしを愛していますか」
- ②「主よ、あなたはすべてをお存じです。あなたは、私があるあなたを愛していることを知っておられます」
- ③イエスが3度ペテロに聞いたのは、ペテロがイエスを3度拒否したからである。
- ④ペテロは、それに心を痛めた。
- ⑤ペテロがイエスを3度拒否したのは、炭火のそばである。

⑥ペテロは、炭火のそばでイエスを愛していると3度告白した。

(2) 3番目の委託

①「わたしの羊を飼いなさい」

*「わたしの羊」とは、信者一般である。

*「飼う」は、1番目の委託と同じく「ボスコウ」(食べさせる)である。

②ペテロは、ペテロの手紙第二を書いてこの命令を果たした。

(3) 「愛」という動詞の使用法について

①「アガパオウ」と「フィレオウ」

②「アガパオウ」と「フィレオウ」

③「フィレオウ」と「フィレオウ」

④2つの動詞に使い分けは、文学形式上の手法と考えられる。

II. ペテロの殉教の予告(18~19節)

1. 18節

Joh 21:18 まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」

(1)「まことに、まことに、あなたに言います」

①厳粛な内容の預言が語られる。

②ペテロは、老年になると苦難に遭遇する。殉教の死の予告である。

2. 19節

Joh 21:19 イエスは、ペテロがどのような死に方で神の栄光を現すかを示すために、こう言われたのである。こう話してから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」

(1) ペテロは、殉教の死を通して主イエスへの愛を示すのである。

①死は神の栄光の現れとなる。

(2)「わたしに従いなさい」と言われた。

①ペテロは、その命令に最後まで従った。

②ペテロは十字架に逆さに吊るされて死んだという伝承がある。

III. 弟子道の原則(20~23節)

1. 20~22節

Joh 21:20 ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子がついて来るのを見た。この弟子は、夕食の席でイエスの胸元に寄りかかり、「主よ、あなたを裏切るのはだれですか」と言った者である。

Joh 21:21 ペテロは彼を見て、「主よ、この人はどうなのですか」とイエスに言った。

Joh 21:22 イエスはペテロに言われた。「わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

(1) ペテロはヨハネのことが気になったので、「この人はどうなのですか」と尋ねた。

①恐らく、イエスは再臨の話を書かれていたのであろう。

②「彼は生きていて再臨を見るようになるのでしょうか」と聞いた可能性がある。

(2) イエスはペテロを叱責された。

①ヨハネに何が起ころうとも、それはあなたには無関係である。

2. 23 節

Joh 21:23 それで、その弟子は死なないという話が兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスはペテロに、その弟子は死なないと言われたのではなく、「わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか」と言われたのである。

(1) ヨハネは、イエスのことばに関する誤解を解いている。

①イエスは、ヨハネが再臨まで生き延びると言われたのではない。

②ただ、「あなたには何の関わりがありますか」と言われたのである。

IV. 後書き (24~25 節)

1. 24 節

Joh 21:24 これらのことについて証しし、これらのことを書いた者は、その弟子である。私たちは、彼の証しが真実であることを知っている。

(1) 「これらのことについて証しし、これらのことを書いた者」

①ヨハネは単なる記者ではなく、「証人」として証言している。

②「私たち」という主語は、この福音書の内容が真実であることを証言している。

③ヨハ 20:31 の補強であり、保証である。

2. 25 節

Joh 21:25 イエスが行われたことは、ほかにもたくさんある。その一つ一つを書き記すなら、世界もその書かれた書物を取められないと、私は思う。

(1) 誇張法が用いられている。。

①この福音書に記された情報は、ほんの一部である。

今日の信者への適用

1. 失敗しても終わりではない。
 - (1) 主イエスは、和解の食事を用意して下さる。
 - (2) 「私を愛するか」と聞いて下さる。
 - (3) 新しい使命を与え、愛の証明を迫って下さる。

2. キリストの助けなしには、収穫はない(特に伝道における霊的収穫)。
 - (1) 主と一対一で交わる必要がある。
 - (2) 聖霊の導きに従う必要がある。

3. 比較の誘惑から解放される必要がある。
 - (1) 一人ひとりに固有の召しを与えられている。
 - (2) 他の働き人との比較は無用である。
 - (3) 「あなたは、わたしに従いなさい」という声に耳を傾ける。